

「閨」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

地球儀の儀は難儀の儀みなづき尽

高橋 章子

地球儀からの発想だろう、地球がさまざまなものに
より難儀していることに思いを馳せ、併せて地球儀の
「儀」から言葉の連鎖を楽しんでいる。難儀も浮かんだ
ろうし、婚儀という言葉も浮かんだだろう。その「婚儀」
の儀では作者の思いはもちろん伝わらない。季語の
「みなづき尽」は暦の上で夏が終ること。その後の長い
超残暑を経て、地球はやっと秋口に入つた。汗は乾いた
か。難儀はどうなつた。渾沌とした時代の一句。

炎蜃を来て天然の谷戸の風

竹森 美喜

自然是作り物ではない、自然に発生したもの。従つて
扇風機や冷房機から出る風は天然ではない。この句では
谷戸の風が天然物。「天然クーラー」と呼ばれる湧水スポーツ
トなどに吹く涼風も、天然の風といつていいだろう。炎
蜃の燃えるような暑さを脱した作者の喜びを感じる。

阿弥陀池チングルマ咲き天国に

田中 京

秋田駒ヶ岳八合目から片倉岳ルートを辿つて阿弥陀池
に。標高1530mにあるこの阿弥陀池は、極楽浄土の
ような聖池であり、雪の消えた後の八月にはチングルマ
の花が群生し、それは眩しい光景という。作者もかつて
ここを訪れたのか、「天国」の気分を味わつたのだ。

ため息をつきつつ眺む繁吹き雨

高橋満利子

繁吹き雨は、激しく吹きつける雨。しぶきになつて降
るのでこの名がある。夏場によく見られるが「滝しぶき」
とは異なり、繁吹き雨は季語の仲間には入っていない。
線状降水帯が季語でないのと一緒だ。でも気候変動の折
いつか季語になる予感がする。「ため息をつき」に共鳴。

地下街へ逃げる裸虫の晩夏

寺田 幸子

ものだけや一瞬無風蛍の夜 高橋美智子
蛍を見に行く夜の心のときめき、高まり。蛍だという

のに何やら華やいだ気持ちになる。穏やかな風が吹いて
いると思つてゐるうちに、それが一瞬止み、闇がしん
と広がる。これは物の怪の気配かと作者は思つた。物の
怪は形の無い、もやもやとした氣というべきもの。その
緊張の中へ蛍が俄かに現れ、舞うのである。幻想的だ。

のこと。また、作者自身もある。晩夏といつても残暑以前であるから、今年のことを考えれば、厳しい猛暑の

さ中であり、我々が崩れて冷房の効いた地下街に避難するのは至極当然。大変な時代に生きてしまっている。

ゆきませう皆と目高の学校へ 長井 敦子

目高の学校である。川の中にある。そつと覗きに行きましたようと、作者は同じ童心を持つお仲間に呼びかけている。「ゆきませう」を上五に置き、元気で明るく涼し気な句になつた

風を切るバイクの僧のサングラス 中嶋きよし

盆僧と判る服装でオートバイに跨つている。熱射や紫外線を遮断するのにサングラスを掛け、まさに異様であるが、複数の檀徒の家を短時間に回るにはこの格好しかない。サングラスに加えマスクで顔を覆い、風を切つて進む僧もまた現代の象徴のような気がする。

七年のプレスコードや原爆忌 中村 敬子

プレスコードは終戦の年から七年間、連合軍や占領軍について不利な報道をしないよう、占領政策を批判しないよう、米国のGHQが日本の新聞・出版活動を取り締まつたその規則。原子爆弾投下の批判も封じられていて

た。作者は「原爆忌」としてこれを詠み記憶する。

これやこの武蔵野の草引いてをる 中村 東子

蟬丸の「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」の「これやこの」である。これこそ武蔵野だと、強く納得した作者。草深い武蔵野に住んで草刈をしている人々を作者は見遣り、「さすが武蔵野であることよ」と感嘆している。

熱帯夜ゴーギヤンの絵の女めき 中村 幹子

ゴーギヤンがタヒチの女性を描いた絵。数枚あるが、みな簡単な衣をまとい、或いは裸同然の自然な姿。作人も恐らく、このゴーギヤンの描いた女性たちに近いカラフルな服装で熱帯夜を過したのだろう。日本にも「あつぱつぱ」という簡単服があつたが、あつぱつぱでは「ゴーギヤンの絵の女」からは遠い。

氷菓売チリンチリンと村の道 野沢 廉子

遠い記憶を辿ると、村へ売りに来る氷菓売。棒付きのアイスキャンデーで、色は水色をしていたような。飴壳も来ていた。飴の代金は確か米で払っていた。それから、桃太郎の幟を立てきび団子を売りに来たのは浅草時代だつたろうか。この句、「チリンチリン」が郷愁を誘う。

みんみんや若き言葉の降るやうに

野村 雅美

みーんみんみんみーの高らかな声に若さが漲る。作者はそれが「若き言葉の降るやうに」と思え、その通りの言葉を置いた。あの声が若き言葉であると捉えた、その一瞬の感性に共鳴した。

開拓の赤星ひとつビールかな 橋本かをる

作者は北海道のご出身。掲出のビールはサッポロビールの前身「開拓使麦酒醸造所」から明治10年に発売された「札幌ビール」。現在のサッポロガービールだ。ラベルの「赤星」が目印で、この赤星は開拓使の希望の星であつた、ひときわ明るい北極星を表わす。開拓時代を偲んでの一句。

父の日の囚人めきし縞パジャマ 橋本 恭子

ハンフリー・ボガートが「俺たちは天使じゃない」で脱獄囚を演じたときの囚人服の横縞。掲出の句からその横縞を思い出し、父の日にも囚人服めいた縞パジャマを着ている父の不憫を感じた。囚人服とは、父が浮かばれない。せめて横縞でなく縦縞のパジャマであるよう祈るばかり。父の日の哀しい句として秀抜。

又来てと子等に送られ月の道 長谷部幸子

子や孫の家を訪ね、歓迎を受けての帰り。「又来てね」の声に送られて外に出ると、月の光が明るい。ここから先は月の道だ。「又来るからね」と別れ、月の雲に濡れながら帰った作者の至福のひとときに幸あれ。

昼顔や木に這ひて木の花の顔 畠山 奈於

昼顔の蔓が木を這い上り、それがあたかもその木の花であるかのように、びしつと開き咲いている。昼顔の木など無いのに、昼顔は堂々と木を乗つ取り、木の顔となる。昼顔の特性をよく捉えて作られた一句である。

解体の手頃な板に三尺寝 浜田 優子

「手頃な板」の表現が全て。解体職人が、家を解体した時に出た廃材の板の上に乗つて三尺寝している句であるが、廃材などと言わず、これを「手頃な板」といつたところにこの廃材のあり様が見えてくる。そこがいい。

はんぺんの蒲焼風味土用入 長谷川菊男

土用と言えば鰻の蒲焼だが、作者はその常識を嫌い、敢えて鰻の代用食である「はんぺん」の蒲焼を食する。偽物と言う勿れ。はんぺんに滲みるこの蒲焼風味が美味しいのだよ。

沙羅の花田園調布の売物件 原田ミチ子

今から四十五年前、漫才の星セント・スイスの「田園調布に家が建つ」のギャグが一世を風靡した。それ程に田園調布は憧れの土地であり、高級住宅地だった。掲出句の田園調布もそのようなイメージの街であり、現在も高い売物件として取引きされているという。沙羅の花は夏椿。実際に沙羅の木を育てた塚本邦雄に言わせると、「一輪一輪は香もなく、さほど美しくはない」らしい。それでも名前が沙羅だから些かの高級感がある。田園調布では庭木として人気があるのだろう。

鬼灯や風も子供も通り過ぎ 春田千歳

風は見えない。そして、この子も姿が見えない。ただ通り過ぎるだけである。通り過ぎるときに、烟の鮮やかな鬼灯が少し揺れた。この鬼灯はお盆のとき仏壇に掛けられ亡き人々をお迎えする。〈鬼灯や向う岸より風が吹く 柿本多映〉

「太陽がいつぱい」地下で観る晩夏 本多遊子

太陽の射さない映画館の地階で観たアラン・ドロンの代表作「太陽がいつぱい」。アラン・ドロンの若さ。二ニ・ロツソの喇叭も良かつたし、ラストの「F I N」の文字の後ろに映る船も印象的だつた。逮捕寸前、電話に呼び出されて立ち上がるドロンの笑顔のよかつたこと、哀しかつたこと。あれこそ、晩夏だつた。

猫の蚤取る時に飛んでくる 平野美子

〈蚤虱馬の尿するまくらもと 芭蕉〉の「蚤」が今、猫蚤となつて、それを取るとき作者に飛んできたといふ。何も飼つていらない私には解らないが、これは猫を可愛がつてゐる家の人の宿命なのか。蚤の句は現代では珍

しい。生活感のある句だ。蚤の出てくる句をもう二つ。〈蚤かんで瘦せて行くなり猫の親 一茶〉〈蚤に泣く子等や障子を張りいそぐ 石橋辰之助〉。

悩みなぞちつちやなものよ大夕焼 藤沢佑吉

模範的な家庭と見られている家でも、何かしらの悩みを抱えている。ましてや個人となると悩みは尽きない。でも、地球という星に生まれその空に広がる大きな夕焼を見ていると、この悩みなんぞちつちやなものよ。作者はこのように達観し老いを重ねている。流石である。

海鳴りの寄せ来る気配白い秋 松本直方

海鳴りの気配から秋の到来を感じた抒情句。白秋を人間の年齢に譬えたくないが、一般的には熟年期・初老期で、人生の危機を感じる年頃らしい。そう思うと、この

「海鳴りの寄せ来る気配」の海鳴りは只の海鳴りではない。抒情句どころか、この句は切羽詰まつた心のあり様を表現しているのではないか。ヒッチコックの『白い恐怖』という邦題のスリラー映画も思い出される。

畠屋とポスト向き合ふ夏つばめ 持田きよえ

畠屋の前に郵便ポストがあり、向き合つてある構図。歩道の歩幅なので距離にして二、三メートル程だろう。そのシチュエーションに夏燕が加わる。燕の巣で待つ子に餌をせつせと運ぶ親燕。畠屋とポストの間の虚空を飛び交う燕を畠屋の職人は一瞥し、ポストはポーカーフェイス。じりじり暑い日盛りの静かな風景。

大甕のオリーブに花かぐら坂 森尻 禮子
日比谷花壇に見る普通のオリーブの木でなく、大甕に投入されたオリーブの大きな木。神楽坂なので普通の家ではなかろう。料亭などを想像してみると、その花も大層立派に見えてくる。大甕が見せ場を作つてゐる句だ。

炎暑なり疲れのにじむ日記帳 和田 郁子

疲れの滲むのは日記帳ではなく、日記帳に書かれた毎日の暮し振りであり、書いた文字にも疲れが見られる。これも炎暑ゆえの疲れ。今年の夏は、35℃超えの猛暑日が多く、百年近い気象統計の中で一番の高温だった由。

この句では「みづいろ」の花が清楚に彩りを添える。彩の薄さが淡々と先祖をお迎えする。そういう趣がある。

水浴びて玉虫色の鴉かな 山田 雅子

寺の天水桶に鴉が代わる代わる飛び込み水浴びをする。そのような鴉の行水を見たことがある。日に一回は水浴びをするようだ。その鴉が玉虫色をしているという。鴉の羽には色素を含んだメラニン顆粒があり、それが太陽の多彩な色の光と出合つた時に、黒以外の色も見せてくれる。この玉虫色も光線の浴び具合でそのように見えたのだろう。玉虫色は鴉への最大級の誉め言葉である。

この列と決めて一途に田草取り 橫須賀智子

田草取りは米作りの大切な作業。作者は援農に出掛け、仲間と作業の分担を決めて自分のエリアの田草を刈る。「この列と決めて一途に」に逸る心が見える。一句に勢いがある。

墓灼くる短めの供花みづいろに 山田 径子
カノカン照りなどという生易しい表現の暑さではない。「墓灼くる」である。作者も墓も陽に灼け相対している。この時季、供花に桔梗や千屈菜も混じることが多いが、

どんぐりを拾ひし心童子らは 阿部 草薙

どんぐりは、それを踏みにじる者も居れば、傍に佇みそれを拾う者も居る。拾わせるのは童心である。いつまでも童心で居たいと、作者自身もこの句で願つている。

風鈴や蒼きインクの試し書き 伊澤やすゑ

文具店のボールペン・万年筆売場には試し書き用の紙が用意されていて、書き具合が試せる。その書かれた物を見たことがあるが「退職届」とか「万事休す」とかの文字が書かれていて、身につまされた。色々の人生がある。掲出句では風鈴が鳴つていてる店なので万事穏やか。作者も伸び伸びとした字で試し書きをされたことと思う。

炎熱や窓のすべてを遮光する 市村 啓子

西日の当たる窓のみならず、窓という窓すべてをカーテンで遮光し熱を遮断した。そうしないと家が生き地獄になる。酷暑、溽暑、猛暑、炎日、大西日。作者の選んだ「炎熱」は作者の体感そのもので、動かない。

車窓より麦秋の黄が吾が故郷 牛込はる子

ふるさとに近づくにつれ、熟れた麦の穂が見えてくる。

車窓に広がる麦秋。そしてその黄の色が郷愁を誘う。「麦秋の黄が吾が故郷」に実感がある。読者にもその車窓か

らの景がよく見える。そのように上手く作られている。

ブローチに見立て笑ふやさくらんば 内海 範子

繋がつた二つのさくらんば。室生犀星の「さくらごは二つながら居りにけり」そのもの。あれは確かにブローチのようにも見える。そう言わればそうだと笑い合つたのである。さくらんばの可愛らしさが出ている句。

ジョギングの子も見る人も玉の汗 大下 壽櫻

真夏の道を駆けている子。玉の汗が流れている。そして、そのジョギングの様子を見ている人も玉の汗を流している。その二人の光景を見守る作者も恐らく、汗を垂らしているのだろう。そう思わせる句の構図が巧み。

岩清水人もけものの声を出す 太田 裕子

獣のような人などというが、人も元来獣である。普段は獣でない振りをしているだけ。しかし炎天下、岩清水が流れ出ている所に来て喉の渴きを癒す段になつた時、この句の如く、人も「けものの声」を出す。隠れていた野性の証明である。極めて人間的な声であり尊い。

兄弟の契りなく散り子かまきり 大和田いそ子

子蠟螂の句で「兄弟の契り」が出て来るとは。生まれ

て間もないのに散り散りに別れていく子蟻たちの不憫。その子ども同士が引き裂かれる蟻の世界を、この作者は慈しみの目で詠んでいる。

今日の暑さ打つ倒れさうとアナウンサー 小河原政子

「ぶつたおれそう」と読む。アナウンサーがそんな乱暴な口をきいたとは思えないが真実なのだろう。昔から「暑いですね」は挨拶の切つ掛けとなる言葉だが、これほど猛暑日が続いてはもはや挨拶どころではない。

たどり着く誰もが無言滝しぶき 小野 直美

滝を詠んだ佳句。はしゃいで滝まで歩いていたのが、前方彼方に滝が見えるにつれ、近づくにつれ、仰ぐにつれ、その崇高さに「誰もが無言」になる。那智の滝がそううだつた。身辺では檜原村の払沢の滝。滝壺を前に神靈スポットさながら無言で滝と向かい合う。この句は形も

佳く、下五に「滝しぶき」をどんと置いて安定感がある。

海の風山の枇杷の実たわわなり 金子かほる

海が見え、海風が届く丘、山。そこに生る枇杷の実が色づき、既にたわわ。毎年ここに佇み沖を眺めては来し方を思う。思い出の凝縮した枇杷の実なのだろう。

鷗翔ぶやブルーモスクの夏空を 金田 知子

ブルーモスクは、世界遺産であるトルコのイスタンブール歴史地域の歴史的建造物の一つ。今回の作品は全篇この遺跡をめぐる旅吟である。巨大ドームと6本のミナレットを持つブルーモスクの美しさ。その夏空を鷗が飛翔する。異国情緒に魅せられた作者の思いが詰まる句。

西瓜切る母の廻りに子等の目が 金田 喜子

昔、テレビで「小さな目」という短篇ドラマがあつた。毎回子どもの視線で、子の目の高さで、大人たちの世界を見る筋立て。この句でも、西瓜とそれを切る母を子等が母の鮮やかな切り方を最前列で目をまん丸くして見ている。「母の廻りに」からその母への絶大な信頼感が窺え、「子等の目が」から今か今かと西瓜を待つ生き生きとした心が見える。捨てがたい思い出の家庭なのだろう。

あめんぼう雨の水輪を八艘飛 北 好夫

壇ノ浦の戦いで、「義経の八艘飛び」さながらの、あめんぼうの動き。次つぎと生まれる雨の水輪を忙しく渡る様子がリアルだ。焦点を一つに絞った好句。

谷中大仏炎天を微動だにせず 木山 有衣

今度十月に吟行する日暮里駅近くの天王寺。この谷中

大仏は、寺に建つ大きな銅像の釈迦如来坐像をいう。その大仏が炎天下にも拘らず微動だにしていないと詠んだこの一句。座つたまま動かず悟りの楽しみ、解脱の樂しみを味わつたという釈迦への憧憬の心を感じた。

つくからは極上の嘘朴の花 久保田勝一

嘘としての極上、花としての極上。「小つちやな嘘をつくぐらいなら極上の嘘をつけ。あの天上に近い美しい朴の花のように」。直接言つてはいないが、下五に「朴の花」が置かれたことで読者はそのように解釈する。句の構成、言葉の運びが滑らかである。

ひときはの夕焼あすは句会です 熊谷由美子

自身に向かつて「あすは句会です」と伝える。遠足の前の晩がそうであつたように、広がる夕焼に心を許しながら明日の句会へ思いを馳せている。いつまでも新鮮な気持ちで句会に臨むその気持ちを私も大切にしたい。

駒をらず存分に咲け花木槿 栗原季星

芭蕉の馬上吟〈道のべの木槿は馬にくはれけり〉を踏まえての句。木槿を見て、あの木槿は馬に食われてしまつたが、今はその馬もない。存分に咲いてくれよと作者は木槿に呼び掛ける。芭蕉への挨拶句でもある。

ピザ好きのあなたへ父の日の特大 小泉まり子

ピザ好きの夫君への愛情たっぷりの句と見た。父の日なので特別のサービスとして特大のピザをプレゼントしたのだろう。「あなたへ父の日の特大」の句跨りの収め方がユニークでまことに見事である。極まっている。

滝浴びてすとんと軽くなるあたま 幸喜美恵子

滝垢離、滝行。滝の水に打たれ、身を清め、自分自身と向き合う。厳肅な修行である。ところが、この句では滝を浴びた結果を「すとんと軽くなるあたま」と詠む。どれだけ身の穢れがあつたのか知らないが、頭は重いより軽い方がいいに決まっている。滝浴び効果抜群の句。

でで虫や 我も七十路で家を背負ひ 小濱けえ子

蝸牛さん、私も今は七十路ながら、貴方と同じように一人でこの家を守つている、頑張りましょうね、という気持ちが伝わってくる句だ。「家を背負ひ」に信念と覚悟が見てとれる。

父の日や九十の春秋背に刻み 小林ゆきお

戦後八十年どころか九十年も生きて来られた。その歳月に亡父の思い出を重ねての一句と読んだ。長い歳月を「背に刻み」が重い。父の日の感慨。

雨こぼす四葩の青や多佳子の忌 小林 玲

〈雄鹿の前吾もあらあらしき息す〉〈夫恋へば吾に死ねよと青葉木苑〉〈乳母車夏の怒濤によこむきに〉の橋本多佳子。紫陽花の句では〈あぢさみやきのふの手紙やや古ぶ〉を遺している。「久女の格調を継ぎ、誓子のきびしい技法に学び、三鬼・静塔の人生派の影響を受け」は沢木欣一の鑑賞。掲出句は、眼前の四葩の青をこぼれる雨から多佳子を偲ぶ。「雨こぼす」の強さが多佳子。

灼くる身を晒し東尋坊に佇つ 齋藤久美子

東尋坊の崖つ淵で風に吹かれている作者を想う。猛暑の日差しを全身に受け、目の前の夏怒濤を見下ろして何を思っているのだろう。「灼くる身を晒し」の「晒し」に痛々しさが感じられるけれども、思い過ごしか。

ハンカチに壊れたままの腕時計 佐藤 和子

修理をせず、かと言つて捨ててもせず、ハンカチにくるんでしまつておいた時計がどこからともなく見つかった場面。そのハンカチの包みに何が入つてゐるかは疾うに忘れてゐるから、開いてみた時は少なからず驚いたことだろう。壊れていたことを思い出し、腕時計に関わる来し方のさまざまな出来事が脳裏に再現された筈である。「壊れたままの腕時計」からそのことが思われた。

柿の花ぼろぼろ捨つる句の多き 島 昌子

自分の俳句は、思い入れもあり、なかなか捨てることが出来ない。これはベテランでもそうで、自選は難しい。だが、そこを乗り越えて、断捨離のように自作への未練を捨てて行く先に未来がある。この作者は敢えて自分に試練を与え、沢山の句を「ぼろぼろ」捨てた。それをぽろぽろ落ちる柿の花と掛けて一句としたのだ。

祭果て出店あたりの簾跡 嶋谷 宗泰

きちんとものを見ている句だ。祭の露店が祭の果てた後に、照明の裸電球を外し店を片付け、周囲を掃除し元通りにする。その簾で掃いた跡をこの句は克明に詠む。すでに出店は畳まれ、誰も居ない。簾目だけが残る。

捩花や根性曲がりは生まれつき 清水 悠太

根性曲りは、根性が堕落しているわけではない。少し曲がつているだけだ。可笑しな世の中が続けば根性も曲がるというものの。この捩花には悪いが、捩れ捩れて立派な根性曲りに。自己肯定の一匁。

寄り道も道草も良し時計草 首藤 久枝

糸状の副花冠がぐるつと連なつてゐるのを時計の文字盤に見立てて、この時計草の名が付いた。その時計草が

寄り道や道草をしているその傍らに咲いている。作者は時計草を見つけ、その複雑な花に魅せられながらそろそろ家に帰らなければと思ったかもしれない。針の動く音が聞こえるかと、時計草を耳に当てたかもしれない。

麦茶飲む会ひたかつたを繰り返し

正田 和子

「会ひたかつたを繰り返し」に臨場感がある。それも、食事の会などでなく麦茶を前にしての再会。この互いの「会ひたかつた」に嘘偽りは無い。麦茶が生ぬるくなるまで何を話されていたのでしよう。

喪の家の庭を飾るや花魁草

新海あぐり

花魁草はオイランバナ。宇都宮貞子氏の『草木おぼえ書』には「ゆさゆさと赤や白の重い頭」をしていると記されている。オジヨロバナ、佐久の八千穂ではツキヨバナという。古くは「ヨーフク」。つまり「夕吹」で夕方風が吹くと咲く。高遠では盆棚に上げるのでポンバナといいうそうだ。喪の家の庭に咲く花魁草。新盆が近い。

朝焼や天辺赤き富士生まる

杉瀬真喜子

朝焼けの空は富士山をも染め、丁度その天辺が赤い。この句ではそれを「染まつた」といわず「富士生まる」と、生き生きと表現している。靈峰富士の崇高なこと。

「物故俳人展」と並びに「冬の俳句展」

期 間 令和7年10月17日(金)～令和8年1月31日(土)
開館時間 10時～16時、第2金曜日10時～19時30分、
休 館 土日祝10時～17時

木曜日休館 9月16日(火)臨時休館、
12月23日(火)～1月8日(木)年末年始休館
会 場 俳句文学館(3階展示室)

展示内容

【物故俳人展】

令和6年に逝去された俳人の代表句、経歴、色紙、短冊など。

坂本タカ女、前田攝子、大橋暁、木村里風子、
奥名春江、甲斐遊系、葉貫琢良、杉良介、
森川光郎、高橋悦男、藤井園彦

(敬称略、逝去日順)

【冬の俳句展】

冬の俳句を展示。

高浜虚子、山口誓子、皆吉爽雨、石田波郷、
深川正一郎など

主 催 公益社団法人 俳 人 協 会

〒169-8521 東京都新宿区百人町3-28-10
TEL 03-3367-6621(代)